

松井さんご一家の逝去を悼む

平成 17 年の暮れ、12 月 29 日、午後 6 時頃、生物科学専攻長から松井さんの留守宅あるいは連絡先の問い合わせがあった。問い合わせは秋田県警湯沢署から理学部防災センター、専攻長、私へと回ってきた。松井さんが秋田県内で大事故に遭われたということだった。松井さんは 12 月 26 日から休暇を取っていたので、一応ご家族と連絡がとれるかどうか電話してみたが、案の定留守だった。多分ご家族と一緒にのだろう、それでは、何処に連絡すれば良いのか。間もなく、松井さん一家 4 人が事故に遭われたということが知らされた。ご実家に連絡を取るしかないが、ご実家はこちらではわからない。松井理恵さん(奥様)と親しい友人が私共の研究室のメンバーだったので、その方に電話して事情を話して調べてもらったところ、松井理恵さんの仙台の実家の電話番号が分かった。それを専攻長に知らせ、理学部防災センターからも研究室まで連絡先電話番号を調べに見えた。

それから、新聞社、テレビ局、秋田県湯沢警察署から次々と電話がかかった。記者の方にどのような状況をうかがったところ、4 人の発見状況とその時の容態を知らせてくれた。4 人とも心肺停止の状態で湯沢市内の総合病院に運ばれ治療中ということだった。インターネットにも松井さんご一家の事故のニュースが載り始めた。

松井さんご家族は秋田県湯沢の泥湯温泉の旅館に 12 月 27 日から 30 日まで逗留予定であったという。29 日午後 3 時頃、松井さんは、外で遊んでいる奥様と二人の子供と別れて部屋に戻った。子供たちが 5 時になっても戻らなかったため、松井さんは旅館に事情を説明し従業員と共に奥様と子供を探しに出た。そして、間もなく、倒れている 4 人が発見された。

高濃度の亜硫酸ガスが事故の原因と見られる。松井さんが部屋で休んでいるとき、子供たちはフライングソーサーで遊んでいたらしい。飛ばし損ねた遊具を取りに雪の山に登った一人の子が亜硫酸ガス溜まりに落ちたのだろう。それを助けようとした母親と兄弟がガス溜まりに入って遭難したものと思われる。松井さんは危険を顧みずガス溜まりに倒れている奥様とご子息を助けようとしたのだろう。松井さんは亜硫酸ガスの危険性、当地が高濃度の亜硫酸ガスを排出する場所であることを知っていた筈だ。しかし、倒れている家族を目にし、助けに走ったのだろう。そして、高濃度のガスを吸ってしまった。

4 人が心肺停止の状態ですべて病院に運ばれて間もなく、奥様と二人のご子息の死亡が伝えられた。松井さんは蘇生したが、意識不明の重体だった。

翌30日、午前中、松井さんの容態が気になって、病院に電話をかけたが、親戚にしか容態を告げることはできないということだった。松井さんのご実家と奥様のご実家の方々が病院に向かわれていること、ご家族の宿泊予定の市内のホテルを病院から知らせてもらった。ご家族が湯沢警察署での事情聴取を終え、病院に着かれたご家族（松井さんの妹君）と電話連絡が取れたのは午後2時だった。その時、松井さんは午後1時46分他界されたと聞いた。私達の願いも空しく。

松井さんが遺伝学研究室の一員になったのは平成2年4月のことだった。松井さんは東京大学大学院理学系研究科生物化学専攻の修士課程修了後、三菱化成総合研究所に職を得、在職中に神戸大学医学部高井義美教授のご指導のもとに低分子量GTPaseの制御因子に関する研究を行い、その成果によって東京大学から理学博士を授与された。低分子量GTPaseの作用機構を解明したいという気持ちが強くなり、会社を退職し基礎的な研究ができる大学に転職を希望した。丁度その頃、東大内で幾つかのポストがあったが、酵母の遺伝学を用いることがこの問題の解明に最も近道であると考えて遺伝学研究室を選んだと後でうかがった。

松井さんが遺伝学研究室に所属するようになったとほぼ同じ時期に、奥様の理恵さんが松井さんの研究の支援を始めた。理恵さんは研究の実績もあり、松井さんの信頼の置ける共同実験者だった。また、実験資材の管理など、研究室の仕事も分担して頂いて、私達も大変助かっていた。子供が小さかった時の一時期を除いて、理恵さんは私共の研究室でラボワークを続けていた。

松井さんが東大に赴任した当時、出芽酵母でも、低分子量GTPaseとしてはRasとRho1,2について研究されていた程度だった。松井さんは早速PCR法を用いて低分子量GTPase遺伝子のスクリーニングに着手し、新規のRHO遺伝子、RHO3とRHO4を発見した。これらの破壊株の表現型から、Rho3が出芽時の芽の維持に重要な働きを果たしていることを明らかにした。RHO3遺伝子と機能的に関連する遺伝子を発見し、それらの解析を大学院学生と共に行い、二人の博士を輩出した。RHO3の研究はさらに発展し、ミトコンドリアの輸送機構の解明へと向かうこととなった。この研究はもう一人の博士を生んだ。松井さんは酵母のミトコンドリアが細胞分裂に際して母細胞から娘細胞へ輸送される時クラスVミオシンMyo2が二つの異なる経路で働くことを明らかにした。一つは、クラスVミオシンMyo2がミトコンドリア上の蛋白質Mmr1（これも松井さんの発見による）を捕まえ、アクチンケーブル上を移動してミトコンドリアを運ぶ仕組みで、これについては学術誌に掲載済みである。もう一方は小胞体上の機能未知の低分子量GTPaseYpt11（これも松井さんの発見による）とクラスVミオシンMyo2が関与する新規の機構で、これに関する論文を準備していた。「この論文はいいところへ出せますよ。」松井さんはそう言って、レフリーのコメントに答えるべく最終

的な詰めの実験をしていた。休暇後の実験の準備が、プレートを保温器に入れたまま出かけ、帰らぬ人になってしまった。

松井さんはご自身の研究課題以外のプロジェクトにも大きな貢献をしてきた。例えば、出芽酵母の細胞周期 M 期終了に関わる因子として私共の研究室で発見した低分子量 GTPase Tem1 は現在知名度の高い蛋白質になっているが、この仕事も松井さんの助けがなければ研究の競争に負け研究成果を論文としてまとめることができなかつただろう。松井さんは、当研究室から発表されたその他の研究課題についての多くの論文の共同執筆者にもなっている。

私がおこへ赴任したのが平成元年なので、松井さんは研究室発足初期から一緒だったことになる。松井さんは研究室の整備にも力を尽くしてくれた。以前務めていた研究所で不要になった実験機器を譲り受け研究室で使えるように取計らってくれた。「実に頼りになる人だな」と実感したものだ。そのときの UV イルミネーターは今でも使っている。

研究室には学生実習、会計、図書、などやらなければならない多くの仕事がある。松井さんにはその多くを分担して戴いた。新入生歓迎会や実習終了時の慰労会など研究室でおこなう行事では、ワインや料理に関する豊富な知識で魅了されたものだった。

松井さんには適当なポストを得て、多くの学生を指導して欲しかった。そのための十分な力量をもった人だったし、豊富な研究テーマを持っていたのだから。何とも悲しく、無念だ。

松井さんご一家のご冥福を祈ります。

平成 18 年 1 月 5 日 東江昭夫